

歴史人物の書状読み解く

高国寺(諏訪)「文の会」200回

諏訪市出身で書道史研究家の渡部清さん(88)＝東京都北区＝を講師に、天皇や公卿、僧、茶人など歴史上の人物の書状を読み解く「文の会」が、7月例会で200回を迎えた。同市諏訪2の高国寺(白木智康住職)が主催し、同寺を会場に月1回開催。受講者は室町から江戸時代の実物の手紙などを鑑賞、差出人や受取人、交友関係を推測、書状への理解を深めている。
(宮坂早苗)



発足から20年、7月例会で200回を迎えた「文の会」。歴史上の人物の書状を読み解き、実物の手紙を鑑賞する受講者＝諏訪市高国寺

後陽成天皇、沢庵、本阿弥光悦ら

「文の会」は、高国寺が所蔵する寺宝の古文書などを解明する過程で専門家の指導を仰ぎたいと、壇徒が縁で渡部さんに講師を依頼、地域の人たちにも呼び掛けて、2004年に発足した。渡部さんは東京教育大学(現筑波大)を卒業、同大学院教育学研究科修士課程修了。NHKに勤務し大河ドラマ「花の生涯」「春日局」やシルクロード、新日本紀行などのタイトルを執筆した。その後、横浜国大教授を歴任、現在は日本相撲協会相撲教習所の講師を務めている。著書は「日本の名筆」「くずし字辞典」など多数、書家や書道美術の評論家としても活躍している。

教材は渡部さんが長年にわたって関わった書状3000点の中から毎月1点ずつ選び、例会にはその都度実物も持参。学校教育では使われない変体仮名など一字ずつを黒板に書き、読みや内容を解説する。「映像や録音などが無い時代、手紙や日記は故人を知る大事な手掛かり。そこからその人の考え方が分かり、筆跡から性格や人柄が推測で

きる。書かれた年代、日付も分かれば歴史的資料に、さらに同一人物の手紙が多く集まれば伝記を作る手掛かりにもなる」という。

同会ではこれまでに後陽成天皇、公卿の近衛信尹、僧の沢庵、茶人の本阿弥光悦らの書状199点を読み解いてきた。7月例会は公卿の醍醐冬基が日野中納言宛てに送った手紙について、中納言のうち誰かを内容や冬基の年表と照らし合わせ、「資茂」であ

ることを推測した。

初回から参加する小城正巳さん(90)は「例会ごとに次回行う手紙のコピーをもらい、予習のつもりで手にすると少しずつ読めるようになってきた。楽しい」。白木住職は「コロナも落ち着き、また新たな気持ちで皆と一緒に学んでいきたい」と話している。

例会は毎月第4月曜日の午後5時30分から。参加希望者、問い合わせは同寺(電話0266・52・1773)へ。